第十八講　漢文学論

以下は、十八世紀末から十九世紀にかけて、幕府の教学制度が整備され、さらにこれをモデルとした学問奨励策が各藩に普及していくことに伴って、漢文を読み書きする行為が士族階級を主な担い手として日本全国に広まったことを述べた後に続く文章である。これを読んで、後の問いに答えよ。（設問の都合で本文の段落に[1]〜[20]の番号を付してある。）

[1] 漢文学習の入り口は素読（そどく）です。初学者はまず『論語』や『孝経』（こうきょう）(注1)などを訓点に従ってただ棒読みする素読を叩（たた）きこまれました。漢籍を訓読するというのは、一種の翻訳、つまり解釈することですから、解釈の標準が定まっていないと、訓読もまちまちになってしまいます。そうすると、読み方、つまり素読を統一することはできなくなります。「素読吟味」という試験は素読の正確さを問うものでしたから、素読、すなわち訓読はおおまかにせよ統一されていることが前提となりましたし、さらにその前提として、解釈の統一が必要でした。つまり、解釈の統一は、カリキュラムとしての素読の普及と一体のものであったと言えるのです。やや極端な言い方ですが、異学の禁(注2)があればこそ、素読の声は全国津々浦々に響くことになったのです。

[2] このように歴史の流れを理解すれば、十九世紀以降の日本において、漢文が公的に認知された素養であったということも、納得しやすいのではないでしょうか。

[3] さて、こうした歴史的な環境の中で、漢文は広く学ばれるようになったのですが、多くの人々は儒者(注3)になるために経書（けいしょ）を学んだのではありませんし、漢詩人になるために漢籍をひもといたのではありませんでした。そうした専門家になるためでなく、いわば基礎学問としての漢学を修めたのです。もちろん、体制を支える教学として、身分秩序を重んじる朱子学が用いられたという側面を無視することはできません。しかし、現実に即して見れば、漢学は知的世界への入り口として機能しました。訓読を叩きこまれ、大量の漢籍に親しむことで、彼らは自身の知的世界を形成していったのです。

[4] となると、その過程で、ある特定の思考や感覚の型が形成されていったことにも、注意を向ける必要があります。といっても、忠や孝に代表される儒教道徳が漢文学習によって身についたと言いたいのではありません。そうした側面がないとは言えないのですが、通俗的な道徳を説く書物なら、漢籍を待たずとも、巷（ちまた）に溢（あふ）れていました。何も漢文を学ばなければ身につか

ないものでもなかったのです。

5 Aもう少し広く考えてみましょう。

6 そもそも中国古典文は、特定の地域の特定の階層の人々によって担われた書きことばとして始まりました。逆に言えば、その書きことばによって構成される世界に参入することが、すなわちその階層に属することになるわけです。どんなことばについてもそうですが、人がことばを得、ことばが人を得て、その世界は拡大します。前漢から魏晋（ぎしん）にかけて、その書きことばの世界は古典世界としてのシステムを整えていき、高度なリテラシー（読み書き能力）によって社会に地位を占める階層が、その世界を支えました。それが、士人もしくは士大夫と呼ばれる人々です。

7 『論語』一つを取ってみても、そこで語られるのは人としての生き方であるように見えて、士としての生き方です。「学んで時に習う…」と始められるように、それは「学ぶ」階層のために書かれています。儒家ばかりではありません。無為自然[注4]を説く道家にしても、知の世界の住人であればこそ、無為自然を説くのです。乱暴な言い方ですが、農民や商人に向かって隠逸[注5]を説くのではないのです。

8 思想でなく文学にしても、同じことが言えます。たしかに、中国最古の詩集である『詩経（しきょう）』[注6]には民歌に類するものが含まれていますが、その注釈や編纂（へんさん）が士人の手になるものである以上、統治のために民情を知るという視線はすでに定まっています。まして、魏晋以降、士人が自らの志や情を託しうるものとして詩を捉（とら）え、ついには詩作が彼らの生を構成するほとんど不可欠の要素になったことを見れば、唐代以降の科挙による詩作の制度化を待たずとも、古典詩はすでに士人のものだったことは、あきらかです。

9 こういう観点からすれば、古典詩文の能力を問う科挙は、士大夫を制度的に再生産するシステムであったのみならず、士大夫の思考や感覚の型――とりあえずこれをエトスと呼ぶことにします――の継承をも保証するシステムだったことになります。

10 日本の近世社会における漢文の普及もまた、士人的エトスもしくは士人意識――その中身については後で述べます――への志向を用意しました。漢文をうまく読み、うまく書くには、字面だけを追って真似（まね）ても限界があります。その士人としての意識に同化してこそ、まるで唐代の名文家韓愈（かんゆ）が乗り移ったかのような文章が書けるというわけです。あるいは、彼らの詩文を

真似て書いているうちに、心の構えがそうなってしまうと言ってもよいでしょう。文体はたんに文体に止まるものではないのです。

11 そういうふうにして、古典文の世界に自らを馴染ませていくこと自体は、中国でも日本でもそれほどの違いがあるわけではありません。ただ、誰がどのようにして、というところには注意が必要です。もう一度、近世日本に戻って考えてみましょう。

12 繰り返しになりますが、日本における近世後期の漢文学習の担い手は士族階級でした。となると、中国の士大夫と日本の武士が漢文を介してどのように繋がるのか、見ておく必要があります。

13 軍功を競う中世までの武士とは異なり、近世幕藩体制下における士族はすでに統治を維持するための吏僚(注7)であって、中国の士大夫階級と類似したポジションにありました。その意味では、士人意識には同化しやすいところがあります。一方、中国の士大夫があくまで文によって立つことでアイデンティティを確保していたのに対し、武士は武から外れることは許されません。抜かなくても刀は要るのが太平の武士です。文と武、それは越えがたい対立のように見えます。

14 しかしそれも、武を文に対立するものとしてでなく、忠の現れと見なしていくことで、平時における自己確認も容易になります。B<u>刀は、武勇でなく忠義の象徴となる</u>のです。これは、武への価値づけの転換であると同時に、そうした武に支えられてこその文であるという意識が生まれる契機にもなります。

15 やや誇張して言えば、近世後期の武士にとっての文武両道なるものは、行政能力が文、忠義の心が武ということなのです。武芸の鍛錬も、総じて精神修養に眼目があります。水戸藩の藩校弘道館を始め、全国各地の藩校が文武両道を標榜したことは、こうした脈絡の中で捉えてこそ意味があるでしょう。たとえば、幕末の儒者佐藤一斎(注8)の『言志晩録』にはこんな一節があります。

刀槊之技、懐怯心者衄、頼勇気者敗。必也泯勇怯於一静、忘勝負於一動、[…]如是者勝矣。心学亦不外於此。

(刀槊の技[剣術]は、怯心[臆病な心]を懐く者は衄し[負け]、勇気に頼る者は敗る。必ずや勇怯を一静に泯し[消し]、勝負を一動に忘れ、[…]是くの如き者は勝つ。心学も亦た此れに外ならず。)

16 臆病も勇猛も勝負も超越してこそ、勝つことができる。武芸はすでに技術でなく精神が左右するものになっています。だからこそ、精神修養の学である「心学」が、武芸の鍛錬になぞらえられているのです。注意したいのは、武芸を心学に喩(たと)えているのではないことです。その逆です。心学を武芸の鍛錬によって喩えるほどに、武芸は精神の領域に属する行為となっていたというわけです。

17 そして寛政以降の教化政策によって、学問は士族が身を立てるために必須の要件となりました。政治との通路は武芸ではなく学問によって開かれたのです。もちろん「学問吟味」という名で始まった試験は、中国の科挙制度のような大規模かつ組織的な登用試験とは明らかに異なっていますし、正直に言えば、ままごとのようなものかもしれません。けれども、「学問吟味」や「素読吟味」では褒美が下され、それは幕吏(注9)として任用されるさいの履歴に記すことができました。武勲ならぬ文勲です。そう考えれば、むしろあからさまな官吏登用試験でないほうが、武士たちの感覚にはよく適合したとも言えるのです。

18 もう一つ、教化のための儒学はまず修身(注10)に始まるわけですが、それが治国・平天下に連なっていることも、確認しておきましょう。つまり、統治への意識ということです。士大夫の自己認識の重要な側面がここにあることは、言うまでもありません。武将とその家来たちもまた、その意識を分かちもつことで、士となったのです。経世(注11)の志と言い換えることもできるでしょう。「修身・斉家・治国・平天下」とは、四書の一つ『大学』の八条目(はちじょうもく)のうち、後半の四つです。『大学』は朱子学入門のテキストとして重んじられ、倫理の基本でもありました。

19 細かく言えば、八条目の前半、「格物(注12)・致知・誠意・正心」との思想的連関はどうなのか、とか、昌平黌(しょうへいこう)や藩校でのむやみな政談はご法度(はっと)だったのではないか、とか、いくらでも議論や検証を行う余地はあります。単純に統治意識の一語ですませられないところがあるのは事実です。近世の思想史をていねいに見ようとすれば、右の捉え方は、ややおおづかみに過ぎるかもしれません。

20 しかし当の学生たちにとってみれば、漢文で読み書きするという世界がまず目の前にあり、そこには日常の言語とは異なる文脈があったことこそが重要なのです。そしてそれは、道理と天下を語ることばとしてあったのです。C漢文で読み書きすることは、道理と天下を背負ってしまうことでもあったのです。

（齋藤希史(さいとうまれし)『漢文脈と近代日本』による）

（注）
1　孝経――儒教の基本文献の一つ。
2　異学の禁――「寛政異学の禁」のこと。寛政の改革の一環として、一七九〇（寛政二）年以降実施された、幕府の教学政策。儒教の学説の一つである朱子学を正統の学問とし、それ以外の学説を幕府の儒者が講じることを禁じた。中国に範をとって「学問吟味」と「素読吟味」という試験制度が設けられ、幕府直轄の学問所（昌平坂学問所＝昌平黌）も正式に定められた。
3　儒者――儒学を学び、修めた人。また儒学を講じる人。儒家。
4　無為自然を説く道家――「無為自然」は、『老子』『荘子』の教えの基本理念で、人為を排し、自然の理法に従って生きること。「道家」は『老子』『荘子』の学説を奉じる人。
5　隠逸――無為自然の理念のもと、俗世を離れて暮らすこと。
6　詩経――経書の一つ。古代中国の殷・西周から春秋時代にかけての詩三〇五編を収める。
7　吏僚――役人、官吏。
8　佐藤一斎――一七七二年～一八五九年。大学者として知られ、一八四一年には昌平黌の教授となった。
9　幕吏――江戸幕府の役人。
10　修身――代表的な経書である『大学』で説かれている八つの項目の一つ。自分の行いを律し、我が身を正しく保つこと。人を治める（斉家・治国・平天下）にあたっての根本に位置づけられる。なお、「斉家」は家を正しくととのえること、「治国」は国を正しく治めること、「平天下」は天下すなわち世の中を平穏に保つこと。
11　経世――世の中を治めること。
12　格物・致知・誠意・正心――「修身」に先立つとされる、物事の理解や心構え。

問1　傍線部Ａ「もう少し広く考えてみましょう。」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　中国に目を転じて時代をさかのぼり、中国古典文に見られる思想と文学の共通点を考慮に入れることで、近世後期の日

本において漢籍が知的世界の基礎になった根拠が把握できるから。
② 中国に目を転じて時代をさかのぼり、科挙を例に学問の制度化の歴史的起源に関する議論を展開することで、近世後期の日本において漢学が素養として公的に認知された理由が把握できるから。
③ 中国に目を転じて時代をさかのぼり、儒家だけでなく道家の思想も士大夫階級に受け入れられた状況を踏まえることで、近世後期の日本において漢文学習により知的世界が多様化した前提が把握できるから。
④ 中国に目を転じて時代をさかのぼり、中国古典文と士大夫階級の意識との関係を考察することで、近世後期の日本において漢文学習を通して思考や感覚の型が形成された過程が把握できるから。
⑤ 中国に目を転じて時代をさかのぼり、中国古典文に示された民情への視線を分析することで、近世後期の日本において漢学の専門家以外にも漢文学習が広まった背景が把握できるから。

問２　傍線部Ｂ「刀は、武勇でなく忠義の象徴となる」とあるが、それによって近世後期の武士はどういうことが可能になったのか。その説明として最も適当なものを次のうちから一つ選べ。

① 近世後期の武士は、刀が持つ武芸の力を忠義の精神の現れと価値づけることで、理想とする中国の士大夫階級の単なる模倣ではない、日本独自の文と武に関する理念を打ち出すことができるようになった。
② 近世後期の武士は、単なる武芸の道具であった刀を、漢文学習によって得られた吏僚としての資格と、武士に必須な忠義心とを象徴するものと見なすことで、学問への励みにすることができるようになった。
③ 近世後期の武士は、刀を持つことが本来意味していた忠義の精神の中に、武芸を支える胆力と、漢文学習によって獲得した知力とを加えることで、吏僚としての武士の新たな価値を発見できるようになった。
④ 近世後期の武士は、武芸の典型としての刀を忠義の精神の現れと見なし、その精神を吏僚として要求される行政能力の土台と位置づけることで、学問につとめる自らの生き方を正当化できるようになった。
⑤ 近世後期の武士は、常に刀を携えることで、統治のためには忠義で結ばれた関係が最も重要であることを自覚し、出世のための学問を重んじる風潮に流されず、精神の修養に専念できるようになった。

問３　傍線部Ｃ「漢文で読み書きすることは、道理と天下を背負ってしまうことでもあった」とあるが、それはどういうことか。本文全体の内容に照らして最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

① 武士の子弟たちは、漢文を学ぶことを通して、幕府の教化政策を推進する者に求められる技能を会得するとともに、中国の科挙制度が形成した士人意識と同様のエリートとしての内面性を備えるようになったということ。

② 武士の子弟たちは、漢文を学ぶことを通して、行政能力としての文と忠義の心としての武とを個々の内面において調和させるとともに、幕吏として登用されるために不可欠な資格を獲得するようになったということ。

③ 武士の子弟たちは、漢文を学ぶことを通して、身を立てるのに必要な知識を獲得するとともに、士人としての思考や心の構えをおのずから身に付け、幕藩体制下の統治者としてのあり方を体得するようになったということ。

④ 武士の子弟たちは、漢文を学ぶことを通して、幕府の教化政策の根幹に据えられている修身を実践するとともに、士人としての生き方を超えた、人としての生き方にかなう経世の志を明確に自覚するようになったということ。

⑤ 武士の子弟たちは、漢文を学ぶことを通して、中国の士人が継承してきた伝統的な思考法に感化されるとともに、それに基づき国家を統治するという役割を天命として引き受ける気になったということ。

問４　この文章の構成に関する説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

① 第1段落～第4段落に示された全体の骨子について、第5段落～第10段落と、第11段落～第20段落との二つの部分が、それぞれの観点から具体的に説明するという構成になっている。

② 第1段落～第2段落が前置き部分に相当し、第3段落～第16段落が中心部分となり、それに対して、第17段落～第20段落が補足部分という構成になっている。

③ 第1段落～第10段落と、第11段落～第20段落という、大きく二つの部分に分けられ、同一の話題に対して、前半が概略的な説明部分、後半が詳細な説明部分という構成になっている。

④ 第1段落～第2段落、第3段落～第11段落、第12段落～第19段落、そして第20段落という四つの部分が、起承転結という関係で結び付く構成になっている。

第十八講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　齋藤希史＝さいとう　まれし（一九六三〜）千葉県生まれ、京都大学卒、京都大学大学院文学研究科中国語学中国文学専攻の博士課程で学ぶ。東京大学総合文化研究科教授

語句

漢籍＝かんせき→漢文で書かれた書籍（本）・漢書
奨励＝しょうれい→よいこととして強く人にすすめること
津々浦々＝つつうらうら→あらゆる港や海岸の意味ですが、それらに限定せず、全国いたるところ、の意味で使われるのが一般的
忠＝ちゅう→まごころをこめて、物事をなすこと。まごころをこめて主君や国に仕えること
孝＝こう→親を大切にし、よく尽くすこと
通俗＝つうぞく→一般向け。一般大衆にとってわかりやすく親しみやすいこと
巷＝ちまた→町中・世の中・世間。何かが行われている場所、現場の意味もある。（例）戦乱の巷と化す
リテラシー→読み書き能力・識字・基礎教養のこと。「リテラチャー」が文学を意味するように「リテラル」「リテラシー」は本来、書きことばを読んだり書いたりする能力のほうです。一方、「オーラル」は、話し言葉にまつわる能力で「聞く力・話す力」です
cf メディア・リテラシー→情報化時代の基礎教養。テレビや雑誌やネットなどのメディアへの対応力など情報吟味のための素養。メディア・リテラシーの先進国であるイギリスでは、小学校の「国語」の授業時間のかなりを当

てて、新しいメディアへの対応力を指導しているそうです

注釈＝ちゅうしゃく→文中の語句解説
編纂＝へんさん→数多くの素材を集めて整理し、本にまとめあげること。（例）辞書を編纂する
エトス→行動様式。ある文化圏や階層に特徴的に見られる行動や振る舞いの仕方、型。エートスともいう
軍功＝ぐんこう→戦などでの功績、成果、てがら
契機＝けいき→きっかけ・動機・転機
標榜＝ひょうぼう→自分の主義主張を公然とかかげること
脈絡＝みゃくらく→物事のつながり、道筋。論理的な筋。因果関係
鍛錬＝たんれん→厳しい修行や訓練で心身や技芸を高めていくこと
官吏＝かんり→役人・公務員・官僚
倫理＝りんり→道徳哲学・人のなすべきこと、なさざるべきこと
法度＝はっと→おきて・禁止事項・禁制
感化＝かんか→影響を与えて、考え方や行動を変えさせること
天命＝てんめい→天や神から与えられた使命や運命

復習問題　第十八講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）素読で漢文をボウ読みする　①某　②棒　③暴　④傍　⑤謀

（イ）通ゾク的な道徳を遵守する　①属　②俗　③族　④賊　⑤続

（ウ）原文に正確なチュウ釈を施す　①忠　②駐　③仲　④注　⑤中

（エ）武人の軍コウを認められる　①興　②効　③功　④幸　⑤公

（オ）江戸のバク藩体制が確立する　①幕　②爆　③漠　④莫　⑤暴

（カ）主君への忠ギを果たす　①戯　②儀　③議　④犠　⑤義

（キ）前後の脈ラクがない発言　①酪　②絡　③烙　④落　⑤楽

（ク）日々武芸の鍛レンにはげむ　①連　②蓮　③錬　④廉　⑤煉

（ケ）官吏のトウ用試験に合格する　①当　②登　③盗　④答　⑤搭

（コ）過去のリ歴を詳細に記す　①裡　②理　③利　④里　⑤履

第十八講　漢文学論

《本文の対比構造》

主役＝日本・近世後期の士族階級

漢文＝
士族の公的な素養・基礎学問
特定の思考や感覚の型
修身→治国→平天下
「文武両道」

文＝統治力
⇧
刀＝武 → 忠義・精神

↑ 中国が範＝モデル

先行モデル＝中国の士大夫階級

古典を読む高度なリテラシー
「学ぶ」階層・統治する階層
あくまで「文」によって立つ
修身→治国→平天下
「科挙」（日本との違い）

⇔ 対比

小さな比較相手

身分秩序の重視
儒者や漢詩人などの専門家
農民や商人／通俗的な道徳

（主役 ⇔ 対比 ⇔ 小さな比較相手）

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

日本の士族階級の「基礎学問」「素養」として漢学・漢文が学ばれます。「知的世界を形成」します。しかも、その「過程」で「ある特定の思考や感覚の型が形成されて」いきました。このことに「注意を向ける必要があります」と、筆者自ら第④段落で強調しています。その「型」のモデルは、中国の「学ぶ階層」である士大夫です。脚注の２にも「中国に範をとって」いることが記されていますよ。つまり、近世後期の日本の武士たちの知的態度をよく知るために「[A]もう少し広く考えてみましょう」というガイドのもと、そもそもモデルである中国の「知の世界の住人」はどうなっているのか、考察が進められています。したがって、④が正解です。①は「中国古典文に見られる思想と文学の共通点」が×です。日本の士族階級と中国の士大夫階級の「共通点」ならOKですが、中国国内、古典文内での「思想と文学」については、そもそも比較考察の対象ではありません。共通点も相違点も話題になっていません。これは正しい対比喪失の誤りです。なお、ここでの正しい対比は〝専門家・農民・商人↔士族階級・士大夫階級〟です。②は「学問の制度化の歴史的起源」や「日本において漢学が素養として公的に認知された理由」が×です。ここで話題になっているのは、そんなことではありません。日本の士族の「思考や感覚の型の形成」であり、モデルの「士大夫の思考や感覚の型」です。したがって記述に反する誤りです。③は「多様化」が×です。あたかも、かつて学ぶ対象が画一・均一・一様だったものが、あるときから「多様」になったかのような対比を勝手に作り上げていますね。正しい対比喪失です。⑤は「専門家以外にも漢文学習が広まった」が×です。この表現では、一般庶民にも広がったかのようです。あくまでも士族階級の素養ですからね。不当な一般化の誤りと呼べるでしょう。

問２《傍線部説明・選択肢》

まず、「刀」のもつ意味が「武勇」「武芸」「軍功」「技術」から「忠義」「精神」に変わったことが大事です。さらに、その転換した「刀＝武↓忠義・精神」が「文＝統治能力」のベースであること、言い換えれば、「文」は「武に支えられて」いることが重要事項です。「文武両道」といっても、文と武が横並びだったり、混ざり合って調和しているというのではなく、「武」が土台で「文」が上に乗るピラミッド構造（下部構造＋上部構造）です。したがって、④が正解です。「武芸の典型としての刀を忠

義の精神の現れと見なし」、「その精神を〜行政能力の土台と位置づける」なんて、完璧です。①は、中国の「模倣」と「日本独自」といったヘンなものを比べています。正しい対比喪失です。しかも「文と武に関する理念」で済ませてしまい、ピラミッド構造を指摘していません。②は「刀を〜吏僚としての資格と、武士に必須な忠義心とを象徴するものと見なす」が×です。後半の「忠義心」はＯＫですが、前半の「吏僚としての資格」が間違いです。それは「刀＝武」ではなく「文」の領域です。この選択肢では「刀」が二つに分岐して「武」にも「文」にもなったかのようです。まったくもって記述に反する間違いです。異なるものを混ぜてしまったという点では、対比混乱の誤りです。③は「刀を持つことが本来意味していた忠義の精神」がシラジラシーほどの×です。「刀」は〝武→忠義〟へと転換したのです。はじめっから「忠義の精神」だったわけではありませんね。中世と近世の区別ができていないという点で、対比混乱の誤りです。⑤は「出世のための学問を重んじる風潮に流されず、精神の修養に専念」が×です。「精神修養」としての武芸、学問は「士族が身を立てるために必須の要件」とありますから、記述に反する誤りです。また「学問」と「精神の修養」を対比的に表現していますが、しくまれた間違いです。両者は基本的に同じものですから。同一性分断の誤りです。

問３《傍線部説明・選択肢》

漢文を学ぶこと、学問することが「士族が身を立てるために必須の要件」になり、しかも学ぶという精神修養や修身が「統治への意識」、「治国・平天下に連なって」いきます。こうして「漢文で読み書きする」ことは、「日常」レベルを超えて「道理と天下を語る」ものになります。したがって③が正解です。①は、まず「技能」が×です。武芸も「技術でなく精神」「精神修養」になっているはずです。これじゃ中世と同じ、旧態依然ということになりますよ。対比混乱の誤りです。さらに「中国の科挙制度〜同様の」が×です。中国の士大夫がモデルであることは確かですが、日本の「学問吟味」は「科挙制度のような大規模かつ組織的な登用試験とは明らかに異なっています」と本文にあります。日本と中国との小さな対比、脇役的対比とはいえ、対比混乱の誤りと言えるでしょう。また「エリート（選ばれし少数者の意味ですよ）」も疑問です。少数か多数かは比較にありませんから、正しい対比喪失の誤りですね。②は「文と〜武とを〜調和」が×です。「文武両道」は調和ではなく上下の階層構造です。記述に反するといっても、これはこれで対比混乱の誤りと呼んでもよいでしょう。④は「士人としての生き方を超えた、人とし

ての生き方」が、もうあきれかえってでんぐりがえるような間違いです。不当な一般化の典型を見る思いです。「人」一般ではなく「士族階級」の話です！　⑤は「国家を統治するという役割を天命として引き受ける」が×です。文中の「天下」は世の中・国家・統治そのもので〝神様から使わされる〟というような意味ではありません。文脈喪失の誤りの典型ですな。

問４《段落構成・選択肢》

第1段落～第4段落は、前書き部分にひきつづき、日本の士族階級と漢文学習の関係が語られています。大きな転換は、第5段落からやってきます。「もう少し広く考えてみましょう」ということで、日本の士族の学びのモデルとして、中国の士大夫階級の学びが紹介されます。その後、第11段落で「もう一度、近世日本に戻って考えてみましょう」と宣言されているように、再び日本の士族階級の学びに復帰します。［日本の士族の漢文学習（文章全体のテーマ）〈1～4〉］→［中国の士大夫（日本のモデルとしての具体的説明）〈5～10〉］→［日本の士族（漢文学習の具体的な説明）〈11～20〉］という大きな枠があります。①が正解です。

②④は、第2段落と第3段落を分離し、ここに境界線があるかのようになっていて、×です。その他もすべてそうですが、区切りとグループをことごとく間違えています。このように、大学受験の現代文で、「段落構成（役割分担や大きな区切りのこと）」を問うてくる以上、それは本文にもわかるように書いてあるということです。そもそも、この講座テキストの【はじめに】に記したように、入試現代文は〝書いてあることを書いてある通りに理解すること〟を問うからです。本番でも、あわてず、さわがず、わかるように書いてある、そのための訓練をしてきた、ということを思い出してください。なお、④の「起承転結」は、評論・論説ではめったにないスタイルだということを言っておきます。漢詩なら「起承転結」が大事な「型」ですが、論文はそうではないのがむしろ普通ですからね。

模範解答

問１＝④　問２＝④　問３＝③　問４＝①

復習問題　解答　第十八講

（ア）②　（イ）②　（ウ）④　（エ）③　（オ）①
（カ）⑤　（キ）②　（ク）③　（ケ）②　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）棒読み　（イ）通俗　（ウ）注釈　（エ）軍功　（オ）幕藩
（カ）忠義　（キ）脈絡　（ク）鍛錬　（ケ）登用　（コ）履歴